

ずいひつ ②

Z U I H I T U



知足

公益社団法人日本下水道協会
理事長

岡久 宏史

今年の1月に前期高齢者になりました。

65歳になったというのに、「不惑」でもなく、「知命」も判らず、「耳順」もできず、まだまだ欲望や煩惱が蠢いていますが、しかし、残りの人生は、常識的に考えて、男子の平均寿命までの16年間。せめてこの残りの人生ぐらひは、邪心無く、心穏やかに過ごしたいものだと思います、以下の図柄を座右の銘としています。



この図柄は、真ん中の四角く書かれている部分を漢字の「口（くち）」とみて、この「口」の周囲に書かれて

いる文字を「へん」や「つくり」と見立て、一番上の「五」の文字から右回りに、一つの漢字にして、「吾（われ）、唯（ただ）、足る（たる）を知る（しる）」と読みます。

ちなみに、この図柄は、石庭で有名な京都の龍安寺にある茶室「蔵六庵」の露地にあり、徳川光圀の寄進とされる蹲踞（ツクバイ）として使われていることでも有名です。

実は、この言葉の出どころは、はっきりとは分かっておらず、禅の格言だとも、孔子の言葉だとも、釈迦の教えだともいわれています。龍安寺のホームページの解説によると、『これは釈迦が説いた「知足のものは、貧しいといえども富めり、不知足のものは、富めりといえども貧し」という「知足」の心を図案化した仏教の真髓であり、また、茶道の精神にも通じる』とあります。

私は、毎朝、この図柄が書かれた色紙（平松礼二〈日本画家〉直筆）を眺めては、「足るを知り、良からぬ妄想や煩惱を捨て、淡々と過ごし、一日が終われば今日は楽しくかつ充実した日であったと感謝し、日々満足して生きたいものだ」とわが心に言い聞かせています。



粹と中身

電気通信大学 名誉教授

新 誠一

山口晃画伯のファンである。本職は六本木ヒルズの俯瞰図を描かれる高名な日本画家である。ヒルズと日本画、やっぱり変な方。もっとも、知ったのは東京大学出版会のPR誌『UP』掲載の「すゝしろ日記」である。本人曰く「どうでも良いことを描く」。それを有言実行されている絵日記である。奥様登場の回が素晴らしく、にたにたしたり、大笑いをしたりしている。

それを脇で見ていた当家の奥が、画伯の作品集と小林秀雄賞を授与された著書『へんな日本美術史』を購入してくれた。絵描きの視点から鳥獣戯画や雪舟の絵などを評論されている。きれい穢いというよりは、線のかすれや色の置き方の順番にこだわった評論である。技術屋が物を見て、材料や加工法を論じる感覚である。これは『すゝしろ日記』中にも垣間見える画伯の鑑を明らかにしたものである。

この著書では、洋と和の区別として「粹」を取り上げている。日本画では、まず粹を決め、そこに色や技法を置いていると論じている。また、例えば印象派は色遣いで粹を消す方向性だと喝破している。

技術開発は西洋的である。新しい色や技法が命である。しかし、画伯に従えば、国内では粹、安全・安心という粹、法律という粹。この粹を押さえて、そこに新しい技術を落とせということになると私は解釈した。

粹がしっかりしていれば、なんでも流すことができる。流すものから始めるのではなく、粹から始める。つまり、技術ありきではなく、まずは粹を押さえることが実用化への近道だと感じる。

そういえば、これは「鋼管」の雑誌。流すものではなく、鋼管の防水性、防食性、耐震性、耐熱性などの粹から入れば、水でも、ガスでも、油でも何でも流せるということだろう。もちろん、流すものから考える西洋流もありだが、話が早いのは風土にあったやり方。もって、参考にしたい。画伯、素敵な奥様に宜しくお伝えください。